

前置詞 *along* と消去目的語再考*
—‘The man walked along the river’は非論理的表現か?—

入学 直哉^{*1}

Rethinking the Preposition *along* and its Deleted Objects
—Is ‘The man walked along the river’ an Illogical Expression?—

Naoya NYUGAKU^{*1}

^{*1} Organization for Fundamental Education

According to a previous study, the sentence ‘The man walked along the river’ is semantically anomalous for some native speakers of English. The study states that the reason that the sentence is semantically anomalous is that the meaning of the sentence is nearly the same as that of ‘The man walked on the river’. Therefore, the study states that as ‘The man walked along the river’ is illogical, it must be derived from ‘The man walked along the bank of the river’ or ‘The man walked along the path by/close to the river’. However, we point out that the preposition *along* is a one-dimensional preposition and the preposition *on* in ‘The man walked on the river’ is a two-dimensional preposition, so the events that the two sentences, ‘The man walked along the river’ and ‘The man walked on the river’, represent are completely different, and we argue that the sentence ‘The man walked along the river’ is not illogical.

Key Words : Preposition *along*, Deleted Objects, Dimensions

1. 緒 言

本論では以下の(1)-(2)のような文について考察する.

(1) The man walked along the river.

(2) The boat sailed along the river.

(1)-(2)は一見すると文法的にも意味的にも全く問題のない正文に思われるが、各々の文の主語の指示物の移動の軌跡を考えた場合、両文における前置詞句 *along the river* の解釈に違いが生じることに気付く. 即ち、(1)においては主語の指示物である *the man* が歩いた場所は「川の外側 (土手など)」であり、他方(2)の主語の指示物である *the boat* が航行した場所は「川の内側」である.

次節で詳細を概観するが、上野(1995)は(1)の基底には次の(3)のような文が存在し、(1)は(3)の前置詞 *along* のカッコ内の目的語が消去された結果生じた文であるとする.¹

(3) The man walked along $\left\{ \begin{array}{l} \text{the bank of} \\ \text{the path} \end{array} \left\{ \begin{array}{l} \text{by} \\ \text{close to} \end{array} \right\} \right\}$ the river.

本論では *along* を一次元前置詞であると考えることにより、*along* の目的語の名詞句の解釈に統一的な説明を与えることが可能であり、それ故、(1)の文は意味的に論理矛盾は引き起こしておらず、(3)のような消去目的語を仮

* 原稿受付 2018 年 2 月 28 日

^{*1} 基盤教育機構

E-mail: nyny@fukui-ut.ac.jp

定する必要はないと主張する。

2. 先行研究：上野(1995)

前置詞 **along** とその目的語との意味関係を論じた先行研究として上野(1995)がある。上野は(1)に関して、英語母語話者の反応は様々で、(1)は疑問を差し挟む余地のない正文であるとみなす者もいるが、他方では(1)は誤文であると即座に断定する者、神経にさわる文、不自然な文と判断する者もいるという。(1)を全くの正文であると認めない英語母語話者が存在する原因として、上野は以下の(4)の Palmer (1972:6)の **along** に関する記述にその手掛かりを求めている。

- (4) *adv.* 1. *With verbs, with the general meaning of CONTINUE TO MOVE IN THE SAME DIRECTION. Almost the same meaning as ON*
come [go, crawl, drive, float, fly, hurry, move, roll, run, rush, sail, swim, walk, etc.] along [on]
prep. Same meaning as ALONG I, but followed by object
come [go, drive, run, etc.] along the street [road, river, etc.]

上野は **along** が(4)に示されているように‘almost the same meaning as ON’であるなら、(1)は次の(5)とほぼ同じ意味を持つことになる主張する。

- (5) #The man walked on the river.

(5)は主語の指示物である **the man** が川の水面上を歩行したことを意味するが、人間が水面上を歩行することは不可能であるから、(5)は意味的に極めて不自然な文である。²つまり、(1)を誤文と判断する英語母語話者は、その意味を(5)と同じように捉えているからに他ならない。上野は(1)を不自然な文と判断する英語母語話者たちが考える **along** の意味は次の二つであると述べている。

- (6) a. (細) 長いものの上 (または、中) を通って
b. どんどん先へ

上野は(6)を根拠に、**along** の目的語には実際に歩行できる場所を示す名詞句が存在しなければならないとし、前述したように(1)は(3)の文からカッコの部分削除した結果得られる文であると主張している。(3)を(7)として以下に再掲する。

- (7) The man walked along $\left\{ \begin{array}{l} \text{the bank of} \\ \text{the path} \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} \text{by} \\ \text{close to} \end{array} \right\} \text{the river.}$

しかしながら、筆者が協力を求めた4名のインフォーマントはみな(1)の文は正文であると判定した。さらに上野が **along** の意味として挙げている(6a)に対する反例は(8)-(9)に示す通り枚挙にいとまがない。

- (8) a. You can take a boat trip along the coast.
b. They bought two miles of river frontage along the Colorado.
c. Keep left along the wall. (OALD)
- (9) a. The houses along the river are all relatively modern, with the notable exception of the old forge.
b. Factories stretch for quite a way along the canal.
c. Both countries have massed troops along the border.

d. Follow the path along the river to the bridge.

e. Unpainted wooden buildings straggle along the main road out of town.

(LDOCE)

上野の主張に従うなら、(8)-(9)に示した文を正しく解釈しようとする、そのすべてにおいて(7)のような何らかの消去目的語の存在を along の後に仮定しなければならない。

3. 前置詞 along の本質

PE along の起源は OE andlang に遡る。語源的には *and-* against, facing, in a direction opposite + *lang* long であり、原義は‘extending away in the opposite direction’, ‘far-stretching’である(Cf. OED s.v. *along*, *adv.* and *prep.*). 元々は *andlangne dæg* (=all day long)のように形容詞として用いられていたが、その後、OE でも属格名詞を支配する前置詞用法が登場し、ME に入り屈折語尾の水平化が起こると、ほぼ現在のような用法が確立した。

OED では前置詞 along の意味は以下のように定義されている。

- (10) 1. Through the whole or entire length of; from end to end of (whether *within*, as a valley, or *by the side of*, as a river).
2. This passes imperceptibly into an indication of *direction* rather than *space traversed*: Through any part of the length of, lengthwise through or parallel to, as distinguished from *across*; following the line of (a road, wall, river, seashore, etc.)

第一義は「長いものの端から端まで」であるが、注目すべきは、端から端までの軌跡は長いものの内側でも外側でも構わないということである。

また、Quirk et al. (1985:683)も along の意味は‘from one end towards the other’（端から端まで）もしくは‘in a line parallel with’（～に並行して）であると、それぞれ以下の例を挙げている。

- (11) a. We walked *along the street*, just looking at people.
b. I took my dog for a walk *along the river*.

以上から前置詞 along のプロトタイプ的スキーマは Fig. 1 であると仮定する。

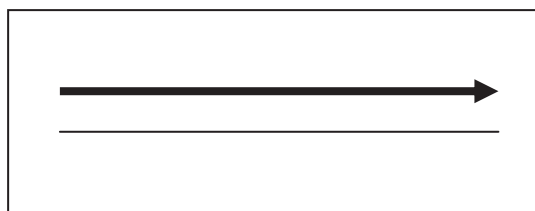


Fig. 1 The Prototypic Image Schema for *along*

場所空間に関わる前置詞は、目的語の名詞句の指示物をどのような次元で捉えているかという、空間認知の問題と深く関係する。例えば、前置詞 *on* の原義は「接触」であるが、空間における目的語の名詞句の捉え方には二通りある。次の(12)を見てみよう。

- (12) a. There is some ice *on that road*.
b. Our cottage is *on that road*.

(Quirk et al. (1985:674))

(12a)は「道路の路面上に氷がある」という意味であるから、*on* の目的語の *that road* は「面」として捉えられる。つまり、(12a)における前置詞 *on* は二次元前置詞として機能していることになる。他方、Quirk et al. (1985)は(12b)における前置詞 *on* は一次元前置詞であり、ここでの道路は「線」と見なされており、*on that road* は *along that road*

であるとしている。つまり、*along* も一次元前置詞ということである。但し、誤解のないように述べておくが、(13a)と(13b)における *that road* は「線」として概念化されてはいるものの、二つの文は全く同じ意味を表すわけではない。³

- (13) a. Our cottage is *on that road*.
b. Our cottage is *along that road*.

(13a)は道路の内側と外側を区切る二本の境界線の一端と *our cottage* が「接触」していることを意味している。勿論、*our cottage* は道路の外側に位置している。(13b)は道路をまっすぐに行ったところに *our cottage* があるという意味であり、*our cottage* が道路の一端と接触しているかどうかは不明である。

4. 分 析

本節では‘*along NP*’が表す事態に関して、認知言語学的観点から考察を行う。2節で示したように、上野(1995:44)は *along* の意味は(6)であるとしている。(6)を(14)として再掲する。

- (14) a. (細) 長いものの上 (または、中) を通って
b. どんどん先へ

さらに上野(1995:44)は「*along* に「～に沿って」の意味を与えることは、あくまでも辞書作成上の便宜的な方法ととるべきだろう (が同時に、この便宜も多分に危険をはらんでいて、例えば、‘to walk along the road’を「*道路の外側を歩く」と誤訳してしまうことにつながる可能性がある。)」と述べている。ここで次の(15)を考えてみよう。

- (15) The man walked along the street.

上野の主張に沿うならば、(15)における主語の指示物 *the man* は「道路の内側」、つまり「車道」を歩いたことになる。しかしながら、(15)に関して筆者の4名のインフォーマントは、主語の指示物が歩いた場所は「道路の外側」、即ち、車道ではなく「歩道」を歩いたことを意味すると即座に回答した。うち1名は道路の内側を歩く場合でも、道路の真ん中ではなく歩道寄りの端の方を歩くことを意味すると答えた。但し、*street* は「建物が建ち並ぶ街中の道路」であるから、「車道」と「歩道」の両方を含む解釈も生じるので、念のために *street* を *road* に代えた次の(16)を示したところ、彼らは道幅が狭い場合は道路の上を歩いたと考えるが、車の往来がある道幅の広い道路の場合は、やはり直観的には「道路の外側」を歩いたことを意味すると答えた。

- (16) The man walked along the road.

筆者のインフォーマントの反応は、(7)のように *along* の目的語には「その上を実際に歩行できる場所を示す名詞句が存在していなければならないと考えるべき」という上野の主張とは明らかに反する。

筆者のインフォーマントの直観に基づくならば、*along the street / road* においてプロファイルされている部分は、Fig. 2に示すように道路の路面ではなく、車道と歩道とを区切る二本の境界線のうちの一端であると考えられる。

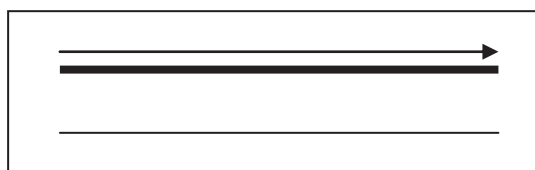


Fig. 2 Image Schema for *along the street / road*

従って、(16)が表す事態は、Fig. 3 もしくは Fig. 4 のようなスキーマで示される。

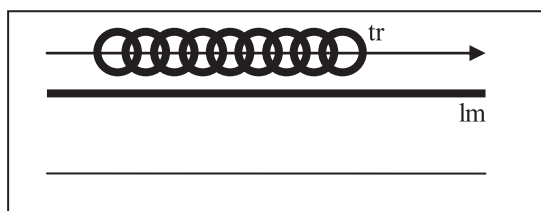


Fig. 3 Image Schema 1 for *The man walked along the road*

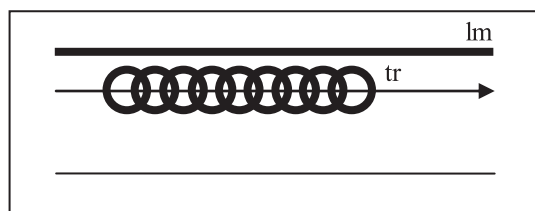


Fig. 4 Image Schema 2 for *The man walked along the road*

また、(16)の along を on に代えた(17)は異なる事態認知を生む。

(17) The man walked on the road.

(17)の on the road においてプロファイルされているのは路面である。従って、(17)では主語の指示物 the man は道路の内側の路面上を歩いたという解釈になり、路面上であれば道路の端であろうと、真ん中であろうと構わない。

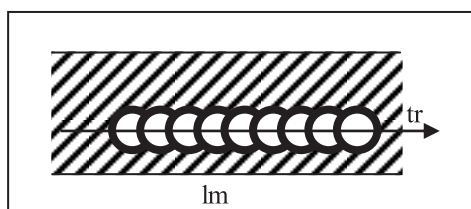


Fig. 5 Image Schema for *The man walked on the road*

5. 考 察

ここで(1)に立ち返って、本論での論点を整理しておく。(1)を(18)として再掲する。

(18) The man walked along the river.

筆者のインフォーマントは(18)は全く問題のない正文であると判断した。彼らのように(18)を正文と見なす英語母語話者は4節で議論したように、(18)は川と土手の境界線がプロファイルされ、the man はその境界線に沿って歩いたという事態認知を行っていると考えられる。即ち、この事態は Fig. 3 と同様のスキーマで表される。ところが上野(1995)は(18)を誤文、不自然な文と判断する英語母語話者がおり、彼らがそのような文法判定を行う理由として、Palmer(1972)を引用し、(18)は(19)とほぼ同じ意味になるからであると述べている。

(19) #The man walked on the river.

それ故、(18)を論理矛盾のない文として理解しようとするなら、(18)は(20)から along の目的語を消去した結果得られる文であると考えなくてはならないと主張する。

(20) The man walked along $\left\{ \begin{array}{l} \text{the bank of} \\ \text{the path} \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} \text{by} \\ \text{close to} \end{array} \right\} \text{the river.}$

上野が(18)を非論理的表現であるとする原因は、Palmer (1972)の along の記述の‘almost the same meaning as ON’が意味するところを取り違えていることによると思われる。(19)の on the river は「川の水面」に言及しているので、

二次元前置詞であることは明らかである。他方、前述したように along は一次元前置詞であるから(18)における ‘along the river’ は、川を一次元の「線」で捉えていることになる。つまり、(18)の along the river と(19)の on the river がほぼ同じ意味を表すとする上野の主張は、一次元の空間と二次元の空間とを同列に扱っていることになる。3 節で触れたが Quirk et al. (1985:674) が ‘Our cottage is on that road’ について ‘the road is viewed as a LINE [‘along that road’], ie dimension-type 1’ と指摘しているように、Palmer の記述にある ‘almost the same meaning as ON’ は、「along は一次元前置詞 on とほぼ同じ意味」と理解すべきであろう。繰り返しになるが、(18)と(19)はほぼ同じ意味を表すことになるという論拠に基づいて、(18)を非論理的な文であると主張するのは不適切である。(18)は論理矛盾のない正文であり、決して(20)のカッコ内の目的語が消去された結果の文ではない。(18)と(20)が表す事態は全く異なるものである。上述した通り、(18)の表す事態は Fig. 3 のイメージスキーマで概念化されるものであるが、(20)において ‘The man walked along the bank of the river’ を例にとると、along の目的語 the bank of the river では焦点化されるのは the bank であり、the river は背景となる。⁴つまり、‘The man walked along the bank of the river’ は、「土手に沿って歩いた」と言う意味であり、この場合、along the bank では「土手と川の境界線」がプロファイルされることとなる。つまり、Fig. 4 と同様のスキーマで概念化される。

ここまで見てきたように、前置詞 along のプロトタイプの意味は、Fig. 1 のようなものである。従って、物理的移動を伴わない(21)のような文が表す事態も Fig. 6 のようなスキーマで示される。

(21) His room is along the corridor.

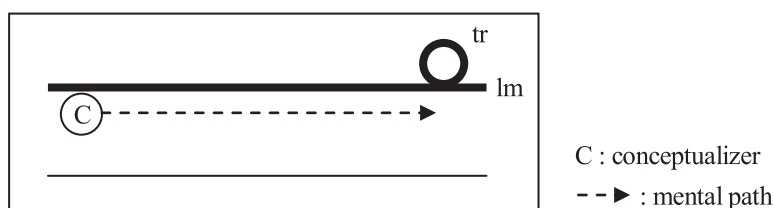


Fig. 6 Image Schema for *His room is along the corridor*

さらに、(22)も Fig. 7 のように概念化できる。

(22) Shops are along the street.

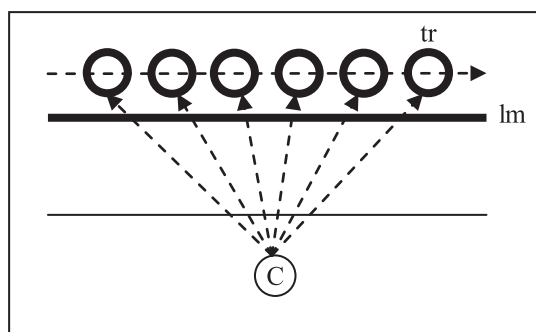


Fig. 7 Image Schema for *Shops are along the street*

6. 結 言

本論では、‘The man walked along the river’は‘The man walked along [the bank of] the river’のような文からカッコ内の along の目的語を削除した結果得られる文であるとする先行研究の主張を批判的に検討した。先行研究では、‘The man walked along the river’が不自然な文であるとする根拠はこの文が‘The man walked on the river’とほぼ同じ意味を表すからであるとされる。しかし、筆者は along は一次元前置詞であるのに対し、‘The man walked on the river’における on は二次元前置詞であることを指摘し、次元の異なる前置詞句を同列に見なすことは不適切であ

り, 'The man walked along the river' は along の目的語の名詞句である the river を一次元の「線」と捉えられていると主張した。つまり, 'The man walked along [the bank of] the river' のような消去目的語の存在を仮定せずとも, 'The man walked along the river' は論理的に何ら矛盾のない正文であると言える。

注

1. 『ジーニアス大英和辞典』の along の項にも同様の記述が見られる。
2. 『ジーニアス和英辞典』(第三版)の【沿う】の項に「川に沿って歩く」に対して 'walk along [on] a river' という英訳が与えられているが, 筆者のインフォーマントは全員, 'walk on a river' は不自然であると回答した。
3. 前置詞 along と on の交替に関して, 筆者のインフォーマントは次の(i)では along の方がはるかに自然であると言う。その理由は, 点線部分を切り取る際に「細長い線状」の軌跡が想起されるからであろう。

(i) Tear $\left\{ \begin{array}{l} \text{along} \\ \text{on} \end{array} \right\}$ the dotted line.

しかし, 次の(ii)では on の方が自然であるとする。これは解答として記入した文字が解答欄の線と「接触」するイメージで捉えられるからである。

(ii) Write your answer $\left\{ \begin{array}{l} \text{along} \\ \text{on} \end{array} \right\}$ this line.

ところが, 記入する解答が記号一文字などではなく, 文のように長い場合を想定するならば, along の容認度は上がるという。

4. 英語の所有表現には-'s を用いる場合と, of 句を用いる場合があるが, 所有者が人間や動物など主体性を持つ場合は, -'s によって表され, 所有者が無生物のように主体性を持たない場合は, of 句によって表されるのが普通である。John's house のように, -'s による所有表現では所有者である John が参照点として際立つが, the bank of the river のように of 句による所有表現で, 所有者が無生物で主体性のない場合は, 所有者は背景化され, 主要部名詞に認知的際立ちが置かれる(Cf. 早瀬(2002:54-59), 深田・仲本(2008:156-157))。

謝 辞

インフォーマントとしてご協力頂いた, Christopher Piroto, Sam Thomson, Bradford Lee, Justin Bailey の各氏にお礼を申し上げます。

文 献

- 深田智・仲本康一郎 (2008) 『概念化と意味の世界』研究社, 東京。
- 早瀬尚子 (2002) 『英語構文のカテゴリー形成』勁草書房, 東京。
- Hornby, A. S. (2010) *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* (OALD), Oxford University Press, Oxford.
- 小西友七・南出康世 (編) (2001) 『ジーニアス英和大辞典』大修館書店, 東京。
- Lindstromberg, S. (2010) *English Prepositions Explained*, Revised Edition, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.
- 南出康世・中邑光男 (編) (2011) 『ジーニアス和英辞典』第三版, 大修館書店, 東京。
- 森山智浩他 (2010) 『英語前置詞の概念—認知言語学・教育学・社会学・心理学・言語文化学の学際的観点から—』ブイツーソリューション, 愛知。
- Palmer, H. E. (1972) *A Grammar of English Words : One Thousand English Words and their Pronunciation, Together with Information concerning the Several Meaning of Each Word, its Inflections and Derivatives, and the Collocations and Phrases into which it Enters*, 千城, 東京。
- Pearson Longman (2009) *Longman Dictionary of Contemporary English* (=LDOCE), 5th edition, Pearson Education, Harlow.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Simpson, J. (2009) *Oxford English Dictionary* (=OED), 2nd Edition, Version 4.0, CD-ROM, Oxford University Press, Oxford.

Tyler, A. and V. Evans (2003) *The Semantics of English Prepositions : Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*, Cambridge University Press, New York.

上野義和 (1995) 『英語の仕組み—意味論的研究—』 英潮社, 東京.

山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』 くろしお出版, 東京.

(平成 30 年 3 月 31 日受理)